

お命ちようだい

梨乃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幽霊嫌いの女子中学生が、幽霊と出会い、幽霊のすべてを知っていく物語。

目次

幽靈遭遇

1

幽靈親友

4

幽霊遭遇

ある平凡でありきたりの学校で、3人組の女子中学生が話している。

中学生が好きそうなお化け話だ。

「ねえ、本当にいるの？そんな幽霊。」

「こわごわ聞いてきたのは桜木葵。お化け嫌いで有名な髪の長い女の子。」

「いるよ。友達が見たって言ってた。」

うれしそうに語るのは、葵とは対照的に幽霊好きな姫路神奈。肩まで髪のある女の子。

「ねえ、見に行かない？」

肝試しを提案するのは、中村麻里。怖がりだけど、幽霊物が好きな不思議な子。

「ええーやめようよ。」

「だって見てみたくない!? 井戸から女性が出てくるんでしょ？」

「いかにも幽霊っぽいじゃん!!」

「ね、行こうよ!! 神奈！」

「……いいわね、行きましょう。」

ナイフを構え、明るい声で言った。

「お命ちよーだい!!」

その一言で、三人は逃げ出した。

しかし、葵だけが伸びすぎた雑草に足を取られ、動けなくなる。

しかし、神奈と麻里は気が付かずに逃げ出してしまふ。

「あ、ちよつと・・・」

葵は怖さのあまり、叫ぶ声も出てこなくなる。

女の幽霊が、襲いかかってきた。

葵は、きつく目を閉じた。

幽霊親友

取り残された葵は、深く目をつぶった。

一瞬、死を覚悟したが、全く痛みは来なかった。

恐る恐る目を開けると、幽霊が葵の一步手前で止まっていた。

「幽霊はえいつ！えいつ！と勢いをつけて葵に襲いかかろうとするが、なぜかそれ以上は動かない。

そのまま逃げればよいものを、葵は声をかけてしまった。

「・・・何してるの？」

驚いたことに、幽霊は普通に答えてくれた。

「これ以上井戸から離れられないのよ。もうっ！」

幽霊の顔は髪で隠されていたが、その声は女の子の声そのものだった。

「・・・女の子？」

「あゝもういいや。」

葵は、その幽霊に妙な親近感を持った。

「ねえ、何で襲いかかってきたの？」

「ん？」

「だって、なんか妙に怖くないっていうか。」

「だったらさつきは何で逃げたのよ!!おかげで届かないじゃない。」

「だって驚いたし・・・届いたら私殺されちゃうし。」

「殺しはしないわよ。魂をもらうだけ。」

「そっちの方がひどい気がするんだけど。」

「気のせい、気のせい。」

子供っぽい幽霊にあっけにとられていた葵は、たまらず吹き出した。

つられて、幽霊も笑い出す。

「ねえ。名前は？」

幽霊が問いかけてくる。

「私は葵。あなたは？」

「私に名前なんてないわよ。ただの幽霊だもん。」

「まあ、いつか。ねえ幽霊さん、何で襲いかかってきたの？」

「早くこの井戸から出て成仏したいのよ。」

「成仏できないの？」

「私、幽霊になる前のこと、全く覚えてないんだけど・・・ただ、感覚で誰かと入れ替

われれば、この井戸の呪縛から解き放たれるってわかってるのよ。」

「だから入れ替わろうとしたの。」

「そうよ。だって、もう何年もここにいるのよ。井戸からあまり離れられないのに、人間はすぐ逃げちやうし。・・・ねえ、私と替わってくれない?」

「嫌よ。幽霊になんかなりたくないもん。」

「ただの幽霊じゃないわよ。呪縛霊。」

「余計嫌よ。」

幽霊と葵は、再び吹き出した。

「なんか、幽霊さんとは初めて会った気がしないね。」

「私も。」

「ねえ、明日も会いに来ていい?」

「え?入れ替わってくれるの?」

「それはいや。でも、暇つぶしの相手ぐらいならできるよ。」

「いいの?やった〜!!」

幽霊は目を輝かせて喜ぶ。

その日は、そこで別れた。